

ヨーロッパの旅

(四)



平井信義

マールブルク——この町は、西ドイツの中で、ぼくの最も好きな町である。八年前のときも、この土地で楽しい一週間を過ごした思い出がある。その一つは、ウエーバー嬢の思い出、もう一つはお城であった。

お城は、十二世紀からのもので、町の北側の小高い丘の上にあった。そのお城を取り囲むようにして、町の赤い屋根屋根が続いていた。この前来たときは、三月であった。外套の襟を立てるようにして、駅前通りの通りをすぎ、坂道をお城の方にのぼっていった。人通りが少なく、町は鎮まりかえっていた。お城への坂道は、どんと登っている。

両側の二階・三階の家並みの間を、左に折れ、右に折れして、だんだんに細くなり、籬と籬との間を漸く人が通れるような場所もあつた。そこは、近道のための急な石段であつた。そこを一人、とっぴりととっぴり登りながら、ぼくは女友だちとここに来る筋骨書きを考えていた。

その女友だちは、淋しい顔立ちの中年の婦人であつた。黒い髪の下に、眉毛がうすく、頬が僅かにこけていた。フランクフルトで会つた外交官の夫人である。彼女は、音楽を学びたかったのであるが、親たちのすすめで外交官夫人になつた。そして、夫に伴つてこのドイツに來たのであつた。しかし、外交官夫人として社交に努めるのが好きでなかつた。何とかして好きな音楽を学びたいと願つたのであつたが、夫はそれをなかなか許さなかつた。その反対をおし切つて、とにかくフランクフルトにいるピアノの教師を訪問し、その序でに音楽会に來た。その時に、ぼくは彼女と廻り合わせたのであつた。それは、音楽会場のテラスであつた。

一人の日本婦人が、テラスの巨大な大理石の柱の側に、黒味があつたドレスを着てしょんぼりと立つていた。ぼくという日本人の存在に気がついてゐるのかいないのか、とにかく柱を背にして立つていた。その目は、手にしたプログラムを見るときもなく見ているようであつた。

三ヶ月も日本の婦人に会わなかつたぼくにとつては、それだけ

で懐しい思いがした。しかし、そばに近寄つてもいいものかどうか、ぼくはためらつた。話しかけても、受けつけないのではないか——と思われるほど、彼女はじつと石の柱を背にしてたずんでゐるのであつた。およそ、テラスの雰囲気には似つかわしくなかつた。

テラスでは、高い天井から釣りおろされたいくつかの大きなシャンデリアの下には、部屋いっぱい輝きがあつた。その中を、イヴニングドレスを着た女性を右にして腕を組んだ男性が、幾組も幾組も足を揃えてぐるぐると歩き廻つてゐた。若い男女がくるかと思ふと、それに次いで年を取つた老夫婦が歩いてくる。それはテラスいっぱい渦となつてゐた。音楽会の休憩時間のテラスには、きまつてそのような華かさがある。しかし、ぼくにはその華かさを楽しむ氣持が起きなかつた。渦の中に入つて、一巡してみたら、ぼくの氣持には異質な渦でしかなかつた。背の高いドイツ人の間で、ちょこちょここと走り廻るねずみのような感じがした。そこで、ちょうど彼女の側を通る時に、人の渦から抜けでてしまつた。

「日本の方でいらっしゃいますか？」

とぼくは、その彼女の前に立ちふさがるようにしてたずねた。

我に返つたように、彼女はぼくの方を見上げ、まぶしそうに目をしばたいた。黒いひとみは、澄んでいて、しかもうるんだよう

な感じがする。幾分広い白い額から浮き出すように眉毛が濃かった。突然の日本語の話しかけに、彼女は夢からさまされたように、ぼくの顔をまじまじと見た。そして、こころのつながりをどう捉えてよいのか、迷っているようであった。

「もう、お永くドイツにいらしてるんですか？」

「いいえ、去年でございます。ずっと、ボンにおりましたが、四日ほど前にここへ参りました」

彼女は、ためらいながらぼくに言った。そして、ぼつんと口をつぐんでしまった。二人の間に沈黙があった。その沈黙をどのように処理してよいか、ぼくもためらった。彼女は相変らず、黙っていた。それ以上、口をきこうとしないようであった。とりつく島がないという状態でもあったが、何か心の底に大きな苦悩が横たわっているようであった。何か深く苦しんでいるように思われた。

「ぼくは、ここに住んでいます。もし、何かご不自由がありましたら、おっしゃって下さい」と、ぼくは名刺を出した。彼女はそれを受けとり、名前を見るときもなくハンドバッグにいれて、「どうもありがとうございます」と軽く会釈をした。しかし、ぼくには殆ど関心がないようであった。ぼくは、うら淋しい気持ちにとらわれた。そして、彼女の前から遠のいて、自分の席のある二階へ上っていった。そのあと、彼女がどのように行動したかは、

全く知らなかった。

彼女に二度目に会ったのは、ちょうど音楽会から一週間目、ぼくの下宿から程遠くない町角であった。和服の下に、白い足袋が小走りに向ってくる。ぼくは、彼女を待ち受けるようにゆっくりと歩く。人通りの少ない町角であったから、彼女もすぐにぼくの存在を認めた。視線が合う。彼女の目は大きく見開くようにして、更に数十歩近づいてきた。

「ちょっと、あなたにご相談したいと思って……。おでかけでしょうか？」

と、向い合うや否や、彼女の方から口を開いた。

「散歩しようと思っていたのです。特に目的がないから、下宿に帰ってもいいのです。散歩しながらでもよければ、静かな林のある方にいてもいいのです」

「そうね……」と、彼女は顎に右の人差指を軽く当てて、ちょっとためらった。

「大したご相談じゃないんですけれど、そうね、今、わたくし、疲れているものですから、お蔭屋の方がいいわ」

ぼくは、彼女を右に歩かせながら、下宿に引き返した。そして、門の鍵をあげ、玄関の鍵をあげ、階段をのぼった。ぼくの部屋は二階の廊下のつき当りにある。階段から二階に入る扉の鍵をあけて、戸を開いた。がらんとした廊下は、いつものようであっ

た。下宿のおばさんも、でかけているようであった。

ぼくの部屋の鍵をあける。数日前、かかりの悪くなっていたその鍵は、がちがちと音ばかり立てて、なかなかあかなかった。ぼくが何辺か廻している間、彼女は足を揃えて、じっと立っていた。

「具合が悪いのですが、なかなかおしてくれない……」一人言のようにいって、最後の力をいれると、ガチャンと大きな音が出て、扉があいた。部屋いっぱい、西陽が射しこんでいた。

「明るいいいお部屋ね」

「静かですよ。それに、安いので助かっています。どうぞ、ソファーの方へおかけ下さい」

彼女は、遠慮なく、ソファーに腰をおろして、ハンドバッグからハンカチを取り出して、口元に当てた。

「何か、冷いものをあげましょうか。或いは、コーヒーを入れましょうか。お湯は、すぐ湧くんです」

彼女は、どっちを所望しようかと考えているようであったが、

「あなたがお飲みになりたければ頂きますけれど、私、あんまり頂きたくないの」

「それじゃ、あとにしましょうね」

二人の間には、俄かに心の隔たりが無いようであった。ぼくの心にも、話の内容をどう選ぼうかという迷いが起きなかったし、

彼女にも遠慮をしている様子が見られなかった。

「実は、ご相談というのはね、夜、ねむれなくて困っているのです。何か、いいお薬をもっていらっしやらないかしら——と思って。或いは、お薬の名前をきかせて下さってもいいのですが、薬屋で買うのは、おっくうな気もしているんです」

「医者の方がないと、この国では薬を売ってくれませんものね。いくつかの睡眠薬を持っていますが、どのようにねむれないのですか……」

「ねつきはいいのですが、夜半に、そうね、一時頃かしら、目がさめると、そのあと寝つかれないで、朝までよく寝ていないのです……」

「ねようとしても、なかなかねむれないので苦しいですね」

「そうなの。前にも何回かこういことがあったから、そう驚いてはいないのですが、今度はちょっとひどいのよ。ノイローゼでしょうね」

「ノイローゼって、わかっていらっしやるんですね」

「わたくし、自分でも原因がはっきりしているんですけど、解決策がないの……」

「原因がわかかっていても、解決策となるとむずかしいことがありますね……」

彼女は、黙った。足袋の先に草履をつっかけてぶらぶらさせな

がら、黙ってしまった。ぼくは、彼女の心中で、どのような葛藤があるのだろうか——と、考えた。

「どっちにしようかと、解決のつかない問題があるのですね」

「どっちか——というのじゃなくて、いくつも——といった方がいいのよ。わたくしの主人は外交官なんです。だけど、私には外交官の妻としての資格がないのね。だから、つい、わがままになってしまうの。主人に悪いと思うことがしばしばよ。でも、わたくしの心の動きを見詰め、それに素直に生きようとする、どうしてもそうなるのね。それに、わたくし、子どもがあるのです。七才になるのだけれど、日本においてしまったの。学校の問題があるし、こちらでの私の生活も考えておばあちゃんにあずけてきてしまったの。それがね、数日前の手紙で、手に負えない子だといってきたのよ。悪い母親ね。子どもを放り出してしまつて……。放り出すっていうわけではないけれど、その方がいいと思つて決心したことなんですけれど……」

彼女は、目を伏せると、その目から、一雫の涙があふれ、鼻と頬の間を通して流れた。一雫が流れると、あとからあとからいく雫かの流れが後を追つた。

慌てて、ハンカチで目を被う。こらえきれなくなったように、両眼をハンカチで被い、その上に両手をしっかりと当てた。おえつをこらえていたが、胸元が大きく波立ち、しゃくり上げるよう

にそれが逆り出た。

ぼくは、黙つてそれを見ていた。悲しみがぼくにも伝わってくるようであつたが、ぼくは、どのように言つてあげたらよいか、どう行動したらよいか、よく分らなかつた。身動きができないようになつて、じつと座つていた。

「ごめんさい。どうしたんでしょ。こんなことになると思いませんでした。急に悲しくなつてしまつて……」

「それが、ぼくにも伝つてくるような気がします……」

「ただねむれば、何でもないのですけれどね。お薬をいだければと思つてきたのですが、もっと、根本的な解決策を考えなければ、いけないのね。子どものことをどうしたらいいでしょ。手に負えないっていうんですが、ちょっと、おばあちゃんからの手紙を読んで下さる？　そして、何か仰しゃつて……」

彼女は、ハンドバッグを開いて、一葉の航空便を取り出した。

(つづく)

